

作家論

棄民と共同体

倉本聰『北の国から』に思う

吉村英夫

映画評論家

1

北海道富良野。父と息子と娘の三人、彼らをとりにまく地域共同体の年代記ともいえるテレビドラマ『北の国から』。一九八一年から始まったが、やがて視聴率が三〇%を超えるまでになって、国民的ドラマともいわれた。

父の黒板五郎（田中邦衛）、息子の純（吉岡秀隆）、娘の螢（中嶋朋子）が、実によく泣く。ポロポロ涙を流す。彼らが泣くと、見ている私も胸に迫るものがあつて涙が止まらなくなる。口を突きだして喋る田中邦衛が巧まずしてユーモアを醸し出すし、吉岡秀隆の二枚目半的演技で思わずにやりとするのだが、次の瞬間、演技者が泣き始め、鑑賞者も涙が流れる。

これだけ登場人物が泣き、見ている者がもらい泣きするドラマを私はさしあたって思い出すことができない。『北の国から』は、連ドラ修了後に、スペシャル版が一九八三年から二〇〇二年まで断続的につくられ、親子が苦闘して生きる姿を丁寧を描いた。吉岡の純が実際の小学生時代から三〇歳までの実年齢を、延々と追

いかけていく。スペシャル版は合計二五時間以上の大河ドラマになった。私は笑いをまじえて泣きに泣いて見続けた。間隔をおいて三回くらい全編を見ているが、毎回、一瞬たりとも画面から目を離せなかった。

日本のテレビドラマ史は一九五三年を起点として六五年の歴史をもつが、本作は最高の一つである。テレビドラマ作家は、向田邦子（『あ・うん』など）、山田太一（『ふぞろいの林檎たち』など）と倉本聰が代表的で、彼らを超える作家は今後も出ないと私は変な確信をもっている。三人は甲乙つけがたいが、今回、この大長編を堪能しつつ至福の時間を過ごしながら、私は、本作と、山田太一『早春スケッチブック』がTVドラマ史の二大達成だと評価することに独りで決めた。



吉岡秀隆

中嶋朋子

田中邦衛

泣きに泣く。だが泣くことの意味は二つある。

一は、涙とともに、観る者は、心につもった苦しみや汚れを流し去る。カタルシス（浄化作用）である。二は、怒りや正義感のようなものを、要するに大事なものとして心のなかで燃やし続けねばならぬ知性を、観客が涙とともに流失させてしまう。

一と二は逆方向である。私たちの内面にある、捨てるべきものも、守らねばならぬものも、涙のなかに溶かして排出させる作用が働くのが一般的である。しかし、このドラマは、二つ目のマイナス面について、泣かせながらも、大事なものを消し去ってしまわないように、倉本聰が周到な配慮をしているように思われる。それは、どういうことか。

『北の国から』は、息子（純）と娘（蛍）の成長物語である。貧しい父親に育てられ、父親の背中を見て、その誠実さに追いつこうとする兄と妹の話として進行する。だが、兄妹ともに、直線的には成長できない。後半のスペシャル版は、主に恋愛体験で物語は進むが、いつまでたってもぐるぐる廻っている。実は父親だって、そのような人生を歩いてきたのだ。愛を育てても、成就できずに次の愛に移っていく。愛によって、例えば純は宮沢りえと、蛍は緒形直人との間で、至福の時を持ちながらも別れて、傷つき泣き崩れていく。その繰り返し。いわば失敗物語の連続でもある。兄妹は成長しているのだが、同じような失敗をし

て、愛を完結できない。一つの愛の物語を終えた瞬間に、兄も妹もまたスタート地点に戻っている。傷つきながら、それでも兄と妹は、また次の愛に挑戦していく。人間心理の可逆性というか、愛の持つ偉大さか。それが二〇年も続く。見る者は、主人公たちが、行きつ戻りつするから、喜怒哀楽を見ていて共有することになり、気分を洗い流してしまえないのだ。

このドラマはサクセス（成功）ストーリーではない。これは重要である。彼らは金持ちになろうとしない、ささやかな上昇志向的なものは出てくるが、立身出世的な夢はもっていない。あるいはそのような位置に作者は彼らを置こうとしない。市井の名もなき民でありつづける。悠久な人類の歴史のなかでの派手なドリームには本質的に、作者倉本は興味を示さない。ここに『北の国から』の決定的な魅力がある。成長をめざして失敗を繰り返す兄と妹は、いつまでたっても物質的には貧しい。純は廃品処分場の「元・文明の利器」（捨てられた家具や電器製品）を再利用することで、まずは決定的不満をもつに至らない。カネと出世を求めて生きる姿勢は皆無である。そして、「普通の」ヒトとして、普通のオトナになろうとして生きている。観る者は、彼らの背丈に同じたひたむきさと必死さに涙することになる。倉本のスクラップ・アンド・ビルド方式的なものとしての高度成長に対する批判は、ここにもある。

ともあれ、決定的な格差社会になり、その格差は拡大すること
はあつても是正される方向にはない。主権者が、富の偏在を是正
すべしとの動きは、ほとんど現実には見当たらない。せいぜい犬
の遠吠えにしか聞こえない。だが、富の偏在は、必然的に切り捨
てられた個人や家族をつくりだす。切り捨てられた者の顕著な例
が「棄民」であろう。だが、そういう「棄民」や、棄民などとは
まったく意識していない多数の、はじめられた人々が、いわば「富
の集中」を支えていることになるのだろう。ともあれ、ますます
対極化させられているのが現代日本である。むろん世界の現実で
もある。



4

倉本聰が昨二〇一七年の「昼の小説」的連ドラ『やすらぎの郷』
で、主人公の石坂浩二に、終始タバコを吸わせて、タバコを吸う
権利を剥奪する世の風潮に反発してみせたのが印象的だった。
（私は正味一五分全一三〇回を欠かさずに見た）。タバコ嫌いの
私だが、拍手喝采した。国中が自動車の排気ガスを否応なく吸わ
されていることは、まぎれもない現実である。電気自動車とかハ
イブリッドとかで帳消しにしようとしているわけだが、タバコに
ついては、執拗に喫煙の自由に抑圧を加えている。タバコの害毒
が強調される。前世紀、喫煙が有害であることは次第に言われる
ようになったが、とりわけて強調されることはなかった。強制力
をもって嫌煙が叫ばれるところまではいってなかった。喫煙者を
援護射撃するつもりは毛頭ないが、自動車などの有毒ガスについ
ては目をつぶっているのだから、喫煙者の過度の排除は、弱い者
いじめのように思える。映画愛好の徒である私は、アメリカの先
住民を、保護するという名目で居留地に追いつめていき、徹底し
て少数民族をいためたためつけたアメリカ史を想起することになる。ジ
ョン・フォードの『シャイアン』を思い出せばよくわかる。ケビ
ン・コスナーの『ダンス・ウィズ・ウルブズ』が白人中心史観へ
の挑戦であったのを思い出すこともできる。禁煙の強制は、ネイ
ティブ排除と、私のなかで重なる。

ともあれ喫煙者への対応は、どこかに弱い者いじめの匂いがす

る。ひがみ根性には違いない。だが倉本の、喫煙擁護&少数者の意地と、『北の国から』の棄民批判には通底するものがあるように思える。それは現代の格差社会の無制限な拡大への異議申し立てと同質的と言ってもよいのではないか。倉本の「泣き」の人情話ドラマには、本人にどれだけの意識なり理論があるかは知りようがないが、高度成長期から今に続く、我々の国家へのウラミツラミが込められているのだと、今にして思いあたる。すくなくとも棄民された人たちへの連帯の気分があることは確かだろう。少数者からの、非論理的であることを承知のうえでの、大きな国家意志との強い違和感が、『北の国から』の底から匂ってくる。いま再見するとそれがよく理解できる。

戦前のジュリアン・デュビエ監督、ルイ・ジューヴェ主演の名作フランス映画『旅路の果て』にもヒントを得ているこの倉本のシナリオ『やすらぎの郷』は、はじめ『北の国から』を製作したフジテレビに持ち込まれたが、フジは蹴った、と某週刊誌が書いている。なんとなくわかるような気がする。

5

黒板一家は、棄民として切り捨てられたが、富良野では地域共同体の連帯のなかにとりこまれることによって、人間回復への契機を得たことも見逃してはならないだろう。東京で五郎は、密度の高い人の群のなかで生きていたが、ばらばらに解体された都会人との人間的なつながりは築けなかった。群衆のなかの孤独な生

活のなかで、妻（いしだあゆみ）は、他の男のところにはしり、日銭を稼ぐような日常のなかで、連帯とは対極の生活に追いこまれていった。それが原因で北海道への逃散（ちほうたん）的帰郷となる。ふるさと帰りという流刑であり、それはまさに棄民として切り捨てられたことを意味するだろう。だが黒板一家は、電気も水道もなく、住居さえままならぬなかで、自立しようとしての努力があつて、そこに地域が力を貸し、彼ら一家は地域共同体の一角に確かな位置を築きあげていくことになった。

国家からは「棄民」されたが、ささやかな北辺の地域の共同体が黒板一家を再生させ、「棄民」から「地域共同体」のなかに生きる方向を見つけさせるにいたる。国家に捨てられた棄民たちが、国家に対峙した地域共同体をつくりあげていたのである。人間性を解体していった高度成長社会への異議申し立てではある。だが畢竟、地方は中央に勝てない社会構造であり、小共同体が国家に勝利したことはないことも自明である。格差は拡大し、地域はつぶされ、老いて連帯はもちこたえられなくなるのが現実である。老いれば棄民され「無縁社会」に突き落とされる。山田洋次が『家族はつらいよ2』で描いた小林稔侍も、現代日本における「棄民」の一人である。

6

私自身、戦後、みずからの内面で築きあげてきた、いわば「民

主的「価値観が、根底から崩されていくように思える現今である。われ人ともにたずさえて「国家的なもの」と対峙する気力、体力、知力をなくしているように思えて暗澹たる気分になることが多い。だが、一回限りの命だから、老いた者は、やがて遠くない時期に消滅する。そして忘れられていく。それでよいのに違いない。

だが倉本の「タバコ」への執念に対応できる最後屁（さいごっぺ）を、私たちロートルは放つてもいいのではないか。いや、小さな放屁が集まって点火したら火がついたというようなことを追究したら痛快ではないか。犬童一心演出の『死に花』のように銀行強盗をして人生最後の「花」を咲かせようなどとはさらさら思わないし、黒板五郎ではないが、いまさら「カネなど望む」はずもないが、「最後屁」というニュアンスにはなんとなく惹かれる。

おーい、朝起きても、することがなくて、日向ぼっこひなたしている、そのみなさん、退屈な毎日から解放させてくれるような痛快なこと、ありませんかね。

(TVドラマ『北の国から』 脚本／倉本聰 演出／杉田成道ほか 音楽／さだまさし 主演／田中邦衛、吉岡秀隆、中嶋朋子、地井武男、岩城滉一 連ドラとして一九八一年から一年間二四回、スペシャル版として一九八三から二〇〇二年まで長編八編フジテレビ製作)

黒澤明『生きる』考

長谷川哲也 三重フェス

1952年 143分

監督 黒澤明

脚本 黒澤明・小国英雄・橋本忍

出演 志村喬

官僚社会を痛烈に批判した作品である。第26回キネマ旬報ベスト・テン第1位。昭和27年度芸術祭賞を受賞している。

主人公はある市役所の市民課の課長。冒頭、物凄い量の書類の山に囲まれた環境の中で、ひたすらハンコを押し続け、無意味に時間を過ごしている姿が描かれている。そうした中、数人の主婦達が「地元にある空き地は水はけが悪く、害虫も発生するので、子どもたちが安心して遊べる児童公園にしてほしい」と、陳情に訪れる。窓口で受け付けた職員は、上司に相談した後、「そのお話でしたら土木課へどうぞ」と他の課を紹介してしまう。ここで前例がない仕事にチャレンジしながらない役所の体質をまず描き出している。土木課以降、回された課・係は、以下の通りである。公園課↓保健所↓衛生課↓環境衛生係↓予防課↓防疫係↓虫疫係↓下水課↓道路課↓都市計画部↓区画整理課↓消防署↓児童福祉係↓市会議員↓助役↓再び市民課へ。「野良犬」で、若い刑事(三船敏郎)が手掛かりを求めて、闇市や焼け跡の町をひたすら

歩き続けたように、黒澤演出は、これでもかといった具合にたくさんさんの課・係を回らせている。役所の仕打ちに主婦たちは怒って立ち去ってしまう。

その後、体調不良から病院を訪れた市民課長は医師から胃潰瘍だと告げられるが、待合室にいた患者と話しているうちに、胃潰瘍ではなく、胃癌で余命いくばくもないことを悟る。初めて死を意識した市民課長は、呆然自棄となり、役所を欠勤し街をさまよう。しかし、彼の胸中を埋めるものは何処にもない。息子夫婦と同居している家庭にさえも（妻は息子が幼い頃に他界）。

ある日、役所を辞めて玩具会社に転職していた部下の女性と偶然出くわし、何度か一緒に時を過ごすようになる。女性は自分が工場で作っている玩具を見せて「あなたも何か作ってみたら」と言った。その言葉に心を動かされた市民課長は「まだ出来ることがある」と気づき、次の日市役所に復帰し、児童公園建設に向けて、市役所内を奔走する。

それから5ヶ月後、市民課長は亡くなった。通夜の席では、役所に復帰したあとの市民課長の性格が変わったような行動が話題にのぼり、原因を追究し始める。そのうち、助役たち市の幹部が退出すると、部下たちは、公園完成に向けての頑張り、死を覚悟した市民課長が最後の大事な仕事として成し遂げるためのものだったのではないか、言い換えれば、生きていた証を残したかったのではないかという結論に辿り着く。市民課長の美談が描かれ

て物語が終了するのが一般的であるように思えるが、脚本を担当した黒澤明・小国英雄・橋本忍たちはここで終わらせない。

お酒がだいぶまわってきた部下たちは更に続ける。日頃から感じていた「お役所仕事」に対する愚痴等を吐き出すのである。通夜の場面より主役は市民課長（志村喬）から、藤原釜足ら部下たちへ交代している。そして、「公園のゴミ箱が紙屑でいっぱいになったので、それを役所が処理しようと思ったら、その紙屑と同じ量の書類が必要」という、名セリフが飛び出す。

役所の仕事は、担当が独自の判断にもとづいて行っていくことはほとんどない。仕事を行う場合は、まず、担当者が「起案」という伺い文書を作成して回す。複数の同僚は、その起案文書を読み、よければ承認して、次々に回していく。最終的に決裁者（課長級以上）が了解した時点で、その仕事にとりかかることが出来る仕組みになっている。この起案文書には何枚かの書類が必要となる。この場合であれば、少なくともゴミ箱の場所を示す地図、どのように処理するかを記載した文書（仕様書）、かかる経費と積算根拠を記載した文書（設計書）などである。起案文書に対して、承認・決裁をした者はその証として、印鑑を押していく。部下役の田中春夫が「はんこ、はんこ」と、投げ捨てるように連呼していたのはこのことを指している。

この映画が製作されてから、70年近くが経過し、役所内の風土も様変わりをしたように思えるが、実はそうとも言えない状況

もあるようにうかがえる。以下の項目にしたがって考えてみたい。
決裁方法 現在、多くの役所では一人に一台パソコンが導入されて、休暇届・出張届など、一部で電子決裁システムが採用されるようになってきている。しかし、依然、紙を使って決裁が採られている場合が多い。

市の教育委員会に勤務していた折、ある自治会から教育委員会が管理する土地が少し空いていたので、そこへ簡易物置を置かせてほしいという依頼があった。市の土地は市長名義なので、許可をとるため、必要書類を添付して起案を上げた。約2週間後にその書類が手元に戻ってきて、押されていた印鑑の多さに驚いたことがあった。起案から決裁まで約2週間かかったのは、承認者が自席にいればすぐに押印可能であるが、出張や休暇等でない場合は承認が遅れる。「お役所仕事は日数がかかる」とよく言われるのはこの所以である。

前例主義 実績のない事案に取り組む場合は、試行錯誤を繰り返さなければならぬ、様々な部署へ調整をかけなければならぬなど、加重負担となるため、現在でも避けられがちである。

縄張り主義 事案が所属する課の所管事項にあわないときは、該当する別の課へ回す。また、隣の課の業務について詳しく知らない。「縦割り行政」と批判を受けて後は、「市民・県民にとって課や係は関係ない。『オール役所』『オール県庁』で取り組み。課を超えて横断的に仕事をこなせ」など、上層部から指示がきてい

るようであるが、まだまだ十分に浸透しているとは言いがたいように思える。

物理的環境 映画の中では、書類が紐で直に綴じられ周囲に山積みされていたが、現在はファイルに綴じられ管理され、保存期間が過ぎると廃棄されていく。しかし、近々に作成したものについては周りに置くため、それが執務スペースを圧迫している。その光景は、映画の場面とあまり変わっていない。

このようにみえてみると、役所内の風土は、この映画が製作された頃と変わっていないことも少なくないように思われる。製作にあたり、よくもこれだけ役所内のことを調べあげ、練りに練った脚本をつくり上げたものであるかと感心させられる。現在もこの作品が色あせないのは、このためであると思う。平成19年、テレビ朝日が、9代目松本幸四郎主演でリメイクしたことがあった。松本幸四郎では、志村喬ほどの味わい深さを表現出来ず、ミスキャストであったように思う。しかも、「ゴミ箱の紙屑処理」のセリフが欠落していた。リメイクに挑む場合は、もつとオリジナル作品を読み込むべきである。